

ふるさと再発見

～幕末維新と徳地～

草莽崛起を訴えた隊則「諭示」

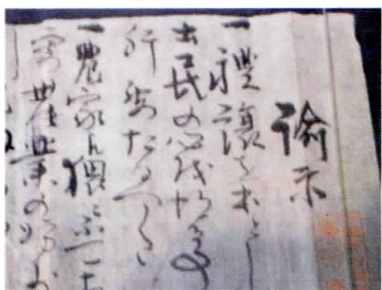
今回は、正慶院で発せられた有名な「諭示」^{ゆじ}についてお話します。

元治元年（1864年）10月20日（旧暦）、三田尻から転陣をしてきた奇兵隊・膺懲隊は、堀地区で戦闘態勢に入りました。そして堀の伏野と小古祖で剣撃訓練、銃陣訓練（奇兵隊日誌）を行います。長い間、静かな生活が続いてきた徳地の人々には、突然にやって来た諸隊の姿はどのように映ったでしょうか。「銃を持った怖い軍隊?」「ならず者の集団?」きっと多くの人々が恐怖や不安・不信におののいたことでしょう。



諸隊の本陣跡案内柱

しかし下関戦争で従来の武士集団では戦えないことを知った高杉晋作は、身分を離れて「志」^{こころざし}のある者が銃を持って戦うことを考えました。吉田松陰の「草莽崛起」^{そうもうくつき}とそれを支える人々の出現を願ったのです。徳地へやって来た奇兵隊・膺懲隊の幹部たちは、自分たちがどのような姿勢でこれから戦おうとするのかを示すため新しい軍隊規則を作りました。これが「諭示」^{ゆじ}です。そして本陣とした正慶院に幹部を集めて書き写させ、全軍の一人一人に徹底させたのです。全文が8条で出来ています。概略は、「みだりに農家に立ち寄らず、牛馬などに道で出逢ったら、道べりによけて早く通らせること」「山林の竹・木・櫨・楮^{はぜ こうぞ}はいうまでもなく道べりの草木も切り取ってはならぬ」など、当時では考えられない



諭示（東行庵）

ほど農民に細かな配慮をし、「戦うためには人心をつかむことが大事。人心をつかむためには各人が正しい行いをし、人々がそれを見習うようにしなければいけない」と、至誠を訴え人としての生き方を強く示したものでした。

維新を成した4藩（長州・薩摩・土佐・肥前）の中で、民衆が銃を取って戦ったのは長州藩だけです。官民挙げて諸隊を支え、後に多くの若者が銃を取った徳地は、吉田松陰が訴えた草莽崛起^{そうもうくつき}を初めて本格的に受け入れた所でもあります。

明治維新を語る上で誇るべきエピソードです。

（徳地幕末維新歴史放談の会 代表 山田 文雄）